



Title	神戸、関西、日本から世界へ、相互理解と医療支援を
Author(s)	大類, 隼人
Citation	目で見えるWHO. 2022, 81, p. 14-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89672
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

神戸、関西、日本から世界へ、 相互理解と医療支援を



認定NPO法人Future Code 代表理事・医師

大類 隼人

外科医、救命救急医として経験を積んだ後、東日本大震災の災害支援に向い、被災地の現状を知る。2010年に発生したハイチ地震の被害状況を知り、その支援に乗り出す。2011年にFuture Codeを立ち上げ、本格的にハイチ共和国、バングラデシュやアフリカ諸国などの開発途上国への医療支援を開始する。英国リーズ大学院卒、国際公衆衛生学マスター。剣道三段。

Future Code の理念

私たち認定NPO法人Future Codeは、世界の貧困地へ医療支援をするために設立された団体です。2010年に起こったカリブ海のハイチの大震災後の支援のため、同じく震災を経験した神戸から2011年に始まった活動で、現在の活動地は、ハイチ、バングラデシュ、西アフリカのブルキナファソの3か国となっています。我々の活動は、阪神淡路大震災の当時では世界から支援を受けた神戸、日本人々と共に、それぞれが世界のためにできることをやろう、というコンセプトがあります。

私は元々、外科医、救命医として日本で勤務しながら、災害後の国々への緊急医療支援として派遣され、その経験から如何に現地の医療を育てるかを考えることとなりました。

ハイチ・バングラデシュでの活動

ハイチでは、2010年の震災で、31万人が亡くなり、多くの住宅や病院は倒壊し、結核が劣悪な環境の中で蔓延していました。そこで、現地の医療者を日本に招いて結核検診の研修を受けてもらい、現地に無料結核検診を導入する計画を開始し、実現させたことが最初の活動でした。また感染症などに対して効果的なプログラムを実施するために、私個人として更なる学びが必要と感じていたため、日本で医者を辞め、その後に英国の大学院を受験、入学、卒業し、国際公衆衛生学のマスターを取得しました。それ以降、

Future Codeは公衆衛生的なアプローチを導入し、支援対象地域全体に対するプログラムを実施しています。活動もその後に様々な縁からハイチだけではなく、バングラデシュ、そしてブルキナファソにも広がりました。

ハイチでは前述の結核対策に加えて、孤児院の食糧支援や、度重なるサイクロンの被災やその後の震災で倒壊した、地域3万人をカバーしていた病院の再建なども行いました。

一方バングラデシュでは経済発展に伴い、感染症は減少し、現在は糖尿病や悪性腫瘍などの慢性疾患が急増しており、地域住民が医療にアクセスできる環境が非常に重要となっています。病院の医療機材を支援したり、また高度医療にも対応できるような現地医療者の育成なども重要な活動です。

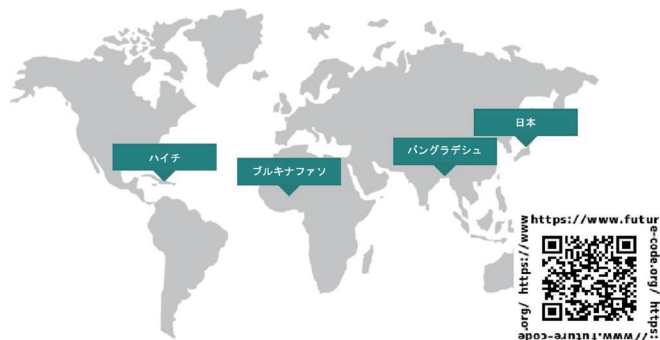
ブルキナファソでの活動

ブルキナファソでは、マラリアや下痢疾患など感染症がまだまだ多く、乳幼児死亡率も地域の病院のデータでは10%弱と高い数字があり、調査を行ったところ、やはり子供の死亡原因の中で大きな

割合を占めていたのはマラリアと、下痢から始まる脱水が多く見受けられました。そこでまずマラリア対策となる蚊帳（ITNs）の配布を行い、住民4400名ほどを対象として、当初この地域の蚊帳の家庭保有率が56%だったものを89%まで引き上げ、以後も継続して90%前後を維持するようにプロジェクト地域の拡大を計っています。実際にこの地域の個々の全住民の家を訪問して分かったことは、「すでに蚊帳は持っていたがうまく設置できていなかった」ことや「使い方がそもそも間違っていた」ことなど様々な問題が多々あり、細かな事ですが時間をかけてそれぞれの家を訪問し、個別に問題を改善するだけでもマラリア予防には大きな効果となりました。また井戸水に大腸菌の混入を避けるため、適切なトイレの建設や手洗い場の設置を行い、特に小さな子供を育てるお母さんの衛生教育の啓発活動も合わせて実施し、下痢疾患などの減少に取り組んでいます。

個人から広がる活動

このように個人から市民活動として広がっていったものが現在の私たちの活動



活動地は3か国であり、それぞれの地域の特性を強みとした相互扶助を考える



①ハイチの地震倒壊後に再建した病院

②ハイチでの無料結核検診と治療

③ブルキナファソでのマラリア対策のための蚊帳の配布

④バングラデシュでの孤児院無料検診



でもあり、事業規模としては他の国際機関ほど大きなものではありません。しかしながら、支援対象の地域は、他団体も介入しておらず、支援が必要とされる場所を敢えて選定しており、さらに賛同いただいた多くの日本の方々からの支援により、支援対象人口は年々拡大しています。Future Code は小回りの利く団体であるからこそ、現地のニーズを的確に捉え、文化にも合わせた丁寧かつ柔軟な仕事ができるよう努力しております。また、医療の問題は貧困と密接につながっているため、近年は活動の幅を広げて包括的な取り組みを目指しています。一例を上げれば、ブルキナファソで採れるシアの木の実の種から抽出したシアバターを日本に輸入し、化粧品会社と連携し、少数生産だからこそその品質が高いハンド



ブルキナファソのシアバターで作ったハダニシアハンドクリーム

クリームなど化粧品を製造し、日本国内で販売しています。これにより、現地ではシアバターの生産を行うための雇用の創出と現金収入の手段の提供を行うことが可能となり、また日本での売り上げは現地に医療支援として還元する取り組みとなっています。

学生たちの組織 Future Code BYCS

2016年には、神戸の大学生を中心とした学生たちの組織 Future Code BYCS（バイクス）が誕生し、彼らにも世界の現状を学んでもらい、国際協力とは、支援とは、などを考えそして行動する、つまり思考力と行動力を育てる学生教育にも取り組んでおります。BYCS はハイチの病院再建のためのクラウドファンディングや、学生自身ができる国境を越えた支援としてのハンドクリーム販売促進事業にも、実際に彼ら自身が日々試行錯誤しながら取り組んでいます。その他にも、衛生的な水へのアクセス改善のため、日本のイノベーションの技術を利用した取り組みの考案など、小回りの利く組織である利点を生かし、柔軟に活動しています。

コロナ禍での活動困難

残念ながら近年、新型コロナウイルス感染症の世界的流行等により、私たちも同様に、支援金の低下が生じた事なども含め、様々な支援活動に対する障壁に苦しみました。世界中が MDGs を経て長年努力した結果、徐々に低下していた極度の貧困が拡大してしまい、さらには2022年に入って黒海周辺の小麦等の産地で紛争が生じたことなども、結局は近い将来に途上国での食糧危機を引き起こす可能性につながってきます。しかしながら、小さな地域の支援活動だったとしても、その真剣に取り組んだ結果はなんらかの実を結ぶことも多く、小さな努力の積み重ねが大切であることは事実です。

おわりに

これからも Future Code は貧困削減や、医療の拡充とアクセスの改善を始め、SDGs の目標達成期限とする 2030 年によりよいものとできるよう、達成される夢をあきらめることなく、希望をもって活動を続けていきたいと思ひます。活動の詳細については、ぜひホームページや各 SNS をご覧いただければ幸いです。

<https://future-code.org/>